

# 観天 望気

## 未来へ手渡すもの

SDGs（持続可能な開発目標）に激しい向かい風が吹いている。2030年まで残すところ8年、コロナ禍は、「貧困の解消」「飢餓の撲滅」をはじめ、保健や教育、不平等などの目標達成に向けたこれまでの努力を大きく後退させてしまった。とりわけ途上国の貧困層への影響は大きく、「誰一人取り残さない」という理念は厳しい状況に追い込まれている。

しかし、「訪れた危機は、進行中だったトレンドを加速させる」の言葉通り、SDGsが世界に呼びかけた「地球を破壊から守る決意」は、コロナ禍で浮かび上がった世界の脆弱性<sup>ぜいじく</sup>を目の当たりにして、さまざまなセクターにサステナビリティの重要性を再認識させたのではと思う。

2015年にSDGsが国連全加盟国によって採択されたことは、その後の分断が進む世界情勢を見ると、奇跡に近い合意だったかもしれない。であればこそ、私たちは、この世界共通の目標を手放すわけにはいかない。なかでも、その解決策を未来の世代に手渡すべき最も重要な課題は、地球温暖化の抑止と持続可能な食料システムの確立だ。この課題を解決しなければ、地球と私たち人間のサステナビリティは保証されない。温暖化については、やるべきことは科学が示している。あとは、大胆な改革とそのスピードが求められている。しかし、持続可能な食料システムの確立は、その緒に就いたばかりだ。

貧困や飢餓をなくし、公平で安定した世界を実現するには、十分な食料生産と安定的な供給システムが必要だが、その一方で、「食料を求める人間の欲求は、人間の健康、平等、気候変動、生物多様性など、すべてを危険にさらしている」（世界資源研究所クレイグ・ハンソン副所長）。SDGsの食料生産と地球環境保全にかかわる目標は、一歩間違えればトレードオフの関係に陥ってしまう。十分な生産を確保できる環境保全型の食料システムをいかにしてつくり上げるか、チャレンジが急がれる。



### 国谷 裕子

国際連合食糧農業機関（FAO）日本担当親善大使

くにや ひろこ

大阪府生まれ。米ブラウン大学卒業。1993年から2016年までNHK「クローズアップ現代」のキャスター。現在、東京藝術大学理事、慶應義塾大学大学院特任教授、自然エネルギー財団理事。SDGsの取材・啓発を中心に活動している。